

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「近代主義者」と邪術：
ヴァヌアツ・トンゴア島民SDA信徒の邪術受容をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 千尋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001574

「近代主義者」と邪術 ヴァヌアツ・トンゴア島民SDA信徒の邪術受容をめぐって

白川 千尋

国立民族学博物館先端人類科学研究部

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 はじめに | 5 SDA信徒の治療者たち |
| 2 セブンスデイ・アドヴェンティスト | 6 考察 |
| 3 ヴァヌアツのSDA | 7 おわりに |
| 4 SDA信徒における特徴 | |

1 はじめに

キリスト教宣教師による活動は、その対象地域の人々にキリスト教だけでなく、近代的な医療や教育など多岐にわたる事物をもたらした。その結果、人々の間では往々にして、キリスト教の浸透とこれら近代的な事物の普及が同時並行的に進行するという事態が生じた。社会ないし文化の多様な領域に及ぶこのようなキリスト教化の作用は、しばしば「近代化 (modernization)」,あるいは「文明化 (civilization)」という語の下に位置づけられ、考察の対象となってきた(杉本編 2002; van der Veer (ed.) 1996)。本稿で対象とするヴァヌアツ共和国を含むメラネシア地域では、ようやく第二次大戦期頃から行政側が地域社会の人々に対する医療や教育などの公的サービスの提供に積極的に取り組むようになったが、それ以前においてこうしたサービスの提供者はもっぱらキリスト教会であった。この点で、メラネシアは「近代化」や「文明化」という語の下に捉えることのできるような現象が、とりわけ顕著に認められる地域の一つと言えるかもしれない。

ほかのメラネシア、あるいは太平洋島嶼諸国の例に漏れず、ヴァヌアツにおいても浸透している宗教はキリスト教であり、人口の9割近くがその信徒である。もともと多くの信徒を擁するのは長老派教会 (Presbyterian Church) であり、これに英国国教会 (Anglican Church) とカトリック教会が続く (National Statistics Office 2000: 20)。ヴァヌアツの島々を支配していたイギリスとフランスが第二次大戦後に公的サービスの提供に本格的に乗り出す以前、病院や学校はこれら三つの主要教派をはじめとするキリスト教各派によって運営されていた。その後1980年にヴァヌアツが独立を果たすと、これらの病院や学校の多くは公立病院や公立学校となり、新たに誕生した政府によって統括されるようになった。ただし、独立後も引き続き独自に学校などを保

有し続けている教派も存在する。セブンスデイ・アドヴェンティスト（Seventh Day Adventist, 以下SDA）がその一つである。同派はヴァヌアツ各地に多数の小学校や中等高等学校をもっており、自派の信徒のなかから養成した教師をこれらの学校に配するなどして独自色の強い運営を行っている。

ところで、ここで取り上げたSDAについてトーマスは次のように述べている。「カトリックやルター派、英国国教会といったほかの教派とは対照的に、SDAは太平洋のいずれの地においても「近代主義者（“modernist”）」として存在する傾向にある」（Thomas 1997: 203）。この指摘はヴァヌアツのSDAに関しても当てはまると考えられる。その理由については追って第6節で明らかにするが、SDAに対するこのような「近代主義者」という評価を念頭に置くならば、「近代化」や「文明化」という語の下に捉えることのできるような現象は、同派の事例においてより顕著に認められるものと想定することができる。したがって、こうした現象に関する理解を深めるうえで、SDAの事例に目を向けることは一定の意義をもつだろう。以上のような見通しの下、本稿ではヴァヌアツのトンゴア（Tongoa）島民のSDA信徒たちに焦点を当てることにしたい¹⁾。そして、これらの人々の間における伝統的な事象の受容のあり方について考察を試みる。考察の対象となる伝統的な事象とは邪術である。

ヴァヌアツの公用語の一つであり、メラネシアのほかの地域で使われているピジン（Pidjin）語に相当するビスラマ（Bislama）語には、邪術に相当する語としてブラックマジック（*blakmajik*）、マジック（*majik*）、ナカイマス（*nakemas*）、ポゼン（*posen*）、ス（*su*）などがある。これらの語はおおむね呪物や呪文などを用いて他者に意図的に危害を加える技術を指す。一般的にこの技術は、それをすでに身につけている者から習得することによって誰でも使うことができるようになると考えられている。以上の諸点に基づくならば、ブラックマジックなどの一連の語によって指示される技術を指す語としては、無意識のうちに発動され、血縁などを通じて先天的に継承されてゆくものを指す妖術（witchcraft）よりも、意図的に行使され、後天的に獲得されるものを指す邪術（sorcery）を使用する方が適当であろう²⁾（エヴァンズ＝プリチャード 2001）。

ヴァヌアツの人々の間において邪術は、伝統や伝統文化などと訳されることの多いビスラマ語のカストム（*kastom*）に相当する事象、すなわち人々の間で伝統的に受け継がれてきた事象として位置づけられる傾向にある。トンゴア島民の間でもこうした見方は共有されている。人々によれば、ビスラマ語でチーフ（*jif*、英語のchiefに由来）とよばれる伝統的な政治リーダーは、かつて社会的な規範を犯した者などに対して制裁を行う際に邪術を使用し、その者を病気にしたり死に至らしめたという。しかし、そのような社会的制裁手段としての邪術は、19世紀後半以降のキリスト教の浸透にともない、教会側によって邪悪なものとなみなされ、駆逐されてしまったとされている。

ただし、その後人々が邪術と無縁な生活をおくるようになったかと言えば、決してそ

うではない。私がトンゴア島や、トンゴア島民が多く暮らしている首都のポートヴィラ (Port Vila) で調査研究に従事していた1990年代から2000年代初頭においても³⁾、人々の間では病気や死、事故などの際に、その要因としてしばしば邪術が引き合いに出されていた (白川 2000; 2001: 86-92)。また、邪術を駆逐することのできる特殊な力をもつとされる長老派の信徒による活動が、トンゴアやポートヴィラを舞台に大々的に展開されたこともあった (白川 1996; 2002b)。こうした活動が行われていたことから、これらの地域における邪術の存在を窺い知ることができよう。事実、とりわけポートヴィラは多くの人々の間で邪術の偏在する地として捉えられている。このことは、たとえば1995年9月16日付けのヴァヌアツ・ウィークリー (Vanuatu Weekly) 紙に掲載された、「ポートヴィラではブラックマジックやナカイマスが根強くはびこっている (Use of Black magic or Nakaimas is strong and rife in Vila)」という一文を含む記事からも垣間見ることができる。

トンゴア島民の多くは、かつてトンゴアのチーフたちが保有していた邪術について、キリスト教の浸透とともに破棄され、廃れてしまったと捉えている。それではトンゴアやポートヴィラで近年もなお流布している邪術とはいったいどのようなものなのだろうか。人々によれば、それはトンゴア以外の地域で駆逐されずに秘かに継承されてきた邪術が移入されたものであるという。これらの邪術はもっぱら利己的な怒りや妬み、恨みなどに基づいて行使されるものと考えられており、社会的な悪としてきわめてネガティブな評価を与えられている。かつてのチーフたちが保有していた邪術が社会的制裁手段としての側面との関連でポジティブに語られる場合があることと比べると、そのような評価はきわめて対照的なものと言えるが、それはさておき、SDAの信徒たちを含む多くの人々の間において、邪術は未だにリアルさを失わずに存在し続けているようにみえる。

さて、本稿の意図するところはすでに述べたとおりであるが、ここで述べた諸点を踏まえてそれをより具体的に言い換えるならば次のようになる。すなわち、「近代主義者」と評されることもあるSDA信徒たちの間において、伝統的な事象としての邪術がリアリティをともなって受容されている背景について考察を行うこと。それが本稿の目的である。

2 セブンスデイ・アドヴェンティスト⁴⁾

安息日再臨派ともよばれるSDAは、アメリカ合衆国北東部において19世紀前半にプロテスタント諸派を横断するような形で繰り広げられていた宗教的動向、ミレリート運動 (Millerite movement) を起点として形成されたものである。ミレリート運動とは、バプティストの信徒牧師 (lay minister) であったウィリアム・ミラー (William

Miller) を中心とした、キリストの再臨を熱狂的に希求する運動である。その熱心な参加者であったメソヂスト信徒で当時17歳のエレン・ゲールド・ハーモン (Ellen Gould Harmon) は、1844年の12月頃からしばしばトランス状態のなかである種の視覚的現象をみるようになる。それは運動の参加者たちによって神からの啓示と捉えられ、多くの人々の注目を集めるようになった。

エレンは1846年にジェームズ・ホワイト (James White) と結婚するが、彼女はその後夫の支援を受けながら自らのみる視覚的現象に基づいた活動に積極的に取り組むようになる。その結果、2人の活動は多くの支持者を集め、そのなかでエレンは「神の使者 (messenger of God)」と位置づけられるようになった。他方、ジェームズは活動のオーガナイザーとしての役割を果たしてゆく。2人の活動を支持する人々の集まりは、やがて1863年には政府から宗教組織として法的に認知されるに至る。宗教組織としてのSDAの誕生である。

ところで、SDAをSDAたらしめるような特徴の多くは、エレンのみる視覚的現象を基軸に据えた活動のなかで培われたものとされている。SDAでは安息日がほかの教派のように日曜日ではなく、土曜日に設定されているが、このことは同派の特徴としておそらくもっともよく言及されることがであろう。また、千年王国主義的、あるいは聖典主義的な色彩が強く、後者においてその対象となるのがもっぱら旧約聖書であるということなども、特徴的な点としてしばしば指摘される。

ただし、これら以外にも無視し得ないことがある。それは身体の清潔さ、あるいは健康の重視である。SDAにおいて人の身体は「聖霊の宮 (the temple of the Holy Spirit)」とされ、それを清潔に保ち、健康の向上に努めることの重要性が強調されている。こうした身体と健康への配慮は「ヘルス・リフォーム (health reform)」という語の下に位置づけられているが、SDAではそれとの関連で避けねばならないことが少なからず規定されており、信徒たちにはこの規定を守ることが求められている。たとえば貝類、甲殻類、ウナギ、サメ、ブタなどを食べること、アルコール類、コーヒー、茶を飲むこと、タバコを吸うことなどは、「聖霊の宮」たる身体の清潔さを維持し、健康を増進するうえで逆効果になるため、避けねばならないとされる。

これらの禁忌は旧約聖書の記述によっても根拠づけられている。たとえば貝類、甲殻類、ウナギ、サメ、ブタなどの忌避については、反芻しない動物や蹄が分かれていない動物、鱗と鰭をもたない魚は汚れており、食べてはならないとするレヴィ記の記述に、またアルコール類、コーヒー、茶の忌避については箴言の記述にそれぞれ依拠しているとされる。さらに、SDAでは菜食が称揚されているが、これも神が人を創造した後、最初に与えた食物が果実、穀類、ナッツ、野菜などであったという創世記の記述に基づくものとされる。

SDAにおいて身体と健康の問題がきわめて重要な位置を占めていることは、SDAが

宗教組織として法的に認知されてから3年後の1866年というきわめて早い時期に、ウェスタン・ヘルス・リフォーム・インスティテュート（Western Health Reform Institute）という医療施設が設立されていることから窺える。バトル・クリーク・サニタリウム（Battle Creek Sanitarium）という名称でも知られるこの施設は、先述の別の名称からも分かるように「ヘルス・リフォーム」を実践してゆくための核となる場としてミシガン州につくられたものであり、そこでは病気を患っている利用者などに対して菜食中心の食餌療法や水治療法、運動や静養などを中心とした療法などが施されていたという。ちなみに、この施設の院長であったジョン・ハーヴェイ・ケロッグ（John Harvey Kellogg）は、後にシリアル製品で広く知られるケロッグ社を創立することになった人物である。

SDAは米国外での布教活動にも早くから積極的であった。最初の活動は1874年にスイスで行われている。本稿の対象としている太平洋島嶼部に関して言えば、1886年に、バウンティ号の反乱事件との関連で知られるポリネシア東部のピトケアン島で、最初の布教活動が行われた。こうした活動の結果、SDAは世界各地に多くの信徒を擁するようになっていく。これらの信徒たちが帰属しているそれぞれの地域の教会（local church）は、カンファレンス（Conferences）ないしミッション（Missions）とよばれる組織によって統括されている。SDAの内部において世界は10のディヴィジョン（Divisions）に分けられており、各ディヴィジョンは複数のユニオン・カンファレンス（Union Conferences）ないしユニオン・ミッション（Union Missions）から構成されているが、先のカンファレンスないしミッションはこのユニオン・カンファレンスないしユニオン・ミッションの下部組織に当たる。太平洋島嶼部についてみれば、この地域は南太平洋ディヴィジョン（South Pacific Division）の管轄下にあり、同ディヴィジョンはパプアニューギニア、中部太平洋（Central Pacific）、西部太平洋（Western Pacific）の三つのユニオン・ミッションからなる。ヴァヌアツの信徒たちが帰属するヴァヌアツ各地の教会は、このうちの西部太平洋ユニオン・ミッションの下部組織ヴァヌアツ・ミッション（Vanuatu Mission）によって統括されている。なお、西部太平洋ユニオン・ミッションの本部はヴァヌアツの隣国ソロモン諸島の首都ホニアラ（Honiara）にある。

3 ヴァヌアツのSDA⁵⁾

SDAがヴァヌアツの島々で布教活動を開始したのは1913年である。この年、米国人宣教師のカルヴィン・パーカー（Calvin Parker）と看護師のハロルド・カー（Harold Carr）が、それぞれの妻とともにマレクラ（Malekula）島北東部のアチン（Atchin）に活動の拠点を設け、翌年には教会と学校を完成させている。また、1919年にはロス・

ジェームズ (Ross James) 夫妻がサント (Santo) 島北部のビックベイ (Big Bay) で、さらに1923年にはドナルド・ニコルソン (Donald Nicholson) 夫妻がアンブリム島北部のリンプル (Limbul) と同島西部のバイアップ (Baiap) で布教活動を始めている。以上に言及した地域は現在もSDAの信徒たちが多く居住し、同派の拠点となっている。

一方、1925年にはサントの南に隣接したアオレ (Aore) 島にアオレ・トレーニング・スクール (Aore Training School) がつくられ、ヴァヌアツ各地に設けられたSDAの運営する学校で教える教師の養成が始まった。また、同島にはこの頃クリニック (Aore Clinic) も開設されている。このクリニックは1961年には病院 (Aore Adventist Hospital) となるが、このように教師養成学校や医療施設が集まっていたアオレは、SDA ヴァヌアツ・ミッションのヘッドクォーターとなってゆく。

以上のように、SDAは20世紀前半からヴァヌアツ各地で活動を積極的に展開するようになったが、その対象地はほとんどの場合キリスト教の未浸透地域ではなく、19世紀より布教活動を展開していたヴァヌアツの主要教派、すなわち長老派、英国国教会、カトリックがすでに浸透している地域であった。このため、SDAは信徒の獲得をめぐるこれら既存の教派との間に摩擦や軋轢を抱えることになった。こうした摩擦や軋轢はアンバエ (Ambae)、アンブリム、マレクラ、タンナ (Tanna)、トンゴアなどの島々で生じ、もっぱらその相手はヴァヌアツのキリスト教各派のなかで最大の信徒数を擁する長老派であった。

長老派は1879年にノルウェー人の宣教師オスカー・ミケルセン (Oscar Michelsen) をトンゴアに派遣し、布教活動を行った。その結果、19世紀末までにはすべての島民が長老派の信徒となっていた。そのような状態はその後しばらく続いたが、1930年代に入ってトンゴアの外に働きに出ていた同島のプラウ (Purao) 集落出身の男性がアオレでSDAに改宗する。また、1940年にはSDAの学校の教師であるタンナ島出身の男性が、先の改宗者の男性などを介してトンゴアで活動を行おうとした。しかし、彼らの試みはプラウとルパレア (Lupalea) 集落のチーフたちの激しい反発に遭い、頓挫してしまう。これらのチーフはともに熱心な長老派の信徒であり、とりわけ後者は長老派教会の要職に就いていた。

以上のような経緯により、トンゴアにおいてSDAの活動はその後しばらく表立っては行われなくなる。しかし、トンゴア島民で初めてSDAの信徒となった先述の男性の家族や親族を中心として、プラウやルパレアの長老派信徒たちの中にはSDAに改宗しようとする者が目立つようになった。こうしたなか、当初SDAがトンゴアで活動を行うことに強硬に反対していたルパレアのチーフが、1950年に一転して自集落で同派が活動を行うことを認めた。そして、1952年には自らSDAに改宗した。それにともないプラウとルパレアではSDAに改宗する者が続々と現れる。トンゴアのほかの集落のチーフたちや長老派の幹部たちの間からは、こうした事態を生ぜしめたルパレアのチーフ

フに対して厳しい批判が噴出した。さらに、1953年にはプラウのチーフが自集落の改宗者たちをプラウから追い出すという事件が起きる。追い出された人々はその後チーフが死去するまでプラウに戻ることができず、その間ルパレアのチーフによって保護され、同集落で暮らしたという。

ともあれ、以上にみたような摩擦や軋轢を各地で引き起こしながらも、SDAはヴァヌアツの人々の間に浸透していった。その結果、1999年に行われた国勢調査によれば、同派は長老派、英国国教会、カトリックの主要3教派に次いで4番目に多くの信徒を擁するに至っている（National Statistics Office 2000: 20）。とりわけその信徒が多いのは、ポートヴィラの位置するエファテ（Efate）島からトンゴアに至るヴァヌアツ中南部の島々によって構成されるシェファ州（Shefa Province）であり、同州においてSDAは長老派に次ぐ信徒数を有している。ちなみに、トンゴア島民の間では依然として長老派がマジョリティを占めているが、先に言及したプラウやルパレアなどの集落にはSDAの信徒も多く、ことにルパレアではSDAの方がマジョリティとなっている。

4 SDA信徒における特徴

さて、ヴァヌアツにおいても多くの信徒を得るに至ったSDAであるが、以下ではトンゴア島民のSDA信徒たちに関して認めることのできる特徴的なことがらを3点ほど指摘したい。

まず1点目は、長老派をはじめとする主要教派の人々の間で重視される傾向にある伝統的な事象、カスタムに対する改変を厭わない姿勢である。ヴァヌアツ各地では、ブタやコショウ科の草本植物カヴァ（*Piper methysticum*）が、伝統儀礼の際などにきわめて重要な役割を果たしてきた。しかし、第2節で述べたように、SDAにおいてブタは食べてはならないとされており、根から抽出した液体を飲用するカヴァについても、アルコールやコーヒーなどと同じように身体に悪い作用をもたらすために飲んではならないとされている。

こうしたことから、信徒たちの間でこれらのものは飲食されない⁶⁾。そればかりか、儀礼のなかで使用することも忌避される場合が多い。たとえばトンゴアのSDA信徒たちの間では、ブタの使用が不可欠とされる伝統儀礼において、ウシが代わりに使用されていた。長老派の信徒たちの間において、このような姿勢は伝統や伝統文化を尊重していないことの証しとして否定的に捉えられており、SDAの信徒たちについて「奴らの世界には「真のカスタム (*tru kastom*)」が存在しない」などと揶揄する者も少なくなかった。ほかの島のSDA信徒についてはあるが、こうした評価に通じる指摘は研究者からもなされている。タンナ島などで調査研究を行ったボヌメズンは、「SDAはおそらくほかのどの教派よりも、カスタムと伝統的な生活様式の基盤を根絶やしにする

(eradicate) ようなことを多くしたのであろう」と評している (Bonnemaison 1994: 78)。

2点目は、第2節で指摘したこととも重なるが、身体などを清潔に保ち、健康を向上させることがきわめて重視されているということである。たとえばポートヴィラのSDA教会に付設された書店では、衛生教育、栄養学、母子保健などに関する出版物が非常に多く扱われている。それらのほとんどは、一般の信徒たちでも理解することのできるような平易な内容のものである⁷⁾。また、ヴァヌアツ各地のSDA学校の統括責任者であるルパレア集落出身の男性によれば、出版物の面だけにとどまらず、教会のさまざまな活動のなかでも衛生と健康に関する話題はきわめて頻繁に取り上げられているという。

私はトンゴアに滞在していた際、長老派の信徒がほとんどを占める自分の暮らしていた集落に比べて、ルパレア集落をはじめとするSDAの信徒たちの多い集落について、雑草がきれいに刈られ、ゴミなどもきちんと片づけられており、清潔で美しいという印象をもった。また、かつて従事していたマラリア対策活動との関連でこれらの集落を訪れた際には、人々がマラリア対策をはじめとする各種の医療活動に対して積極的であるという印象ももった。以上に言及したことがらのうち、集落の清潔さや美しさについては先に引用したボヌメゾンも同じようなことを述べているが (Bonnemaison 1994: 78)、ここで例示したことがらは、SDAの信徒たちの間における衛生と健康を重視する姿勢の現れとして理解することができるように思われる。

3点目は、飲食物に関する禁忌をはじめとすることがらが、しばしば「科学」的とされる視点から説明されるということである。第2節では、飲食物に関する禁忌が旧約聖書の記述によって根拠づけられていることについて触れた。しかし、それだけにとどまらず、そうした禁忌が「科学」的にみても妥当性があるものとして説明される場面に私はしばしば出会った。ブタ肉には寄生虫が含まれているため食べてはならない、カヴァには皮膚疾患を引き起こす成分が含まれているため飲んではならない、タバコには肺ガンなどを誘発する成分が含まれているため吸ってはならないといった説明が、そのような場面でよく耳にしたものである⁸⁾。これらはいずれも一般の信徒たちがビスラマ語でサエンティフィック (*saentific*, 英語の *scientific* に由来) な視点、すなわち「科学 (*saens*)」的な視点に基づくものと位置づけ、語っていたものである。

同じような説明は、ほかのことがら、たとえば薬草の効力に関する説明についても認めることができた。トンゴア島民の間では病院などに代表される西洋医療だけでなく、伝統医療 (*kastom meresin*) も盛んに利用されている。そのなかで使用される主な療法は薬草を使用するものであるが、私はSDAの信徒たちからその効力に関する「科学」的な視点に基づくとされる説明をしばしば耳にした。そのなかでは、説明の対象となっている植物が、特定の病気の治療に効力を発揮するとされる成分を有していることや、

西洋医療の医師や医学を学んだ者といった「科学」の専門家によって、その効力の「科学」的な妥当性が裏づけられていることなどが指摘されており、薬草の効力に関する説明はもっぱらこれらの点に依拠する形でなされていた。

5 SDA信徒の治療者たち

前節末尾ではトンゴア島民の間で伝統医療が盛んに利用されていることについて触れたが、その中心的な担い手と人々から目されているのが、トンゴア島民の使用する言語でナムヌア (*namunua*)、あるいはムヌアイ (*munuai*) とよばれる治療者たちである。これらの治療者たちは薬草などに関する豊富な知識をもつとともに、病気の原因を特定するための技術を身につけているという点で一般の人々とは異なる。私がトンゴアに滞在していた当時、島には24人の治療者がいた。そのうち20人は長老派の信徒であったが、SDAの信徒も1人含まれていた。トンゴア島民でSDA信徒の治療者は私の知り得る限り、この人物とポートヴィラで生活しているプラウ集落出身者の2人だけであった。以下では前者をA、後者をBとし、病気や療法に関するそれぞれの知識や認識についてみることにする⁹⁾。

Aは1950年生まれで、ルバレア集落の隣のラヴェンガ (*Ravenga*) 集落出身である。SDAの小学校の教師をヴァヌアツ各地で務めた経歴をもち、私がトンゴアに滞在していた当時は同島のSDA小学校の校長をしていた。彼が病気の治療を行っていることは、SDAの信徒たちだけでなく長老派の信徒たちなどにも広く知られており、彼は校長としての仕事の余暇時間を利用して、訪ねてくる患者の治療に携わっていた。

患者がやって来ると、Aは症状や発症の経緯、それらと関連がありそうな出来事などに関する詳細な質問を行う。また、症状が馴染みのものでない場合には西洋医療の医学書 (Werner 1977) を参照することもある。この本は、専門的な医療従事者がいない地域において病気に対処するための知識と技術を解説したものである。図画などが多用され、一般の人々も読み得るように工夫されており、主に無医村などで活動する、専門的な医療従事者ではないボランティアなどを対象としている。Aはこうした本も併用しながら病因を特定してゆく。そのようなやり方は、長老派信徒の治療者たちが共通に用いる夢見の手法、すなわち就寝中にみた夢を解釈することによって病因を特定するというやり方とはかけ離れている。また、長老派信徒の治療者たちは霊的存在 (*naetamat*) を病因と見立てた場合、夢のなかでその霊的存在と交渉を行い、病気を治そうとするが、Aは夢見をしないためそのようなことも行わない。さらに、病気の治療法に関して言えば、長老派信徒の治療者たちのなかには薬草とともに呪文 (*namair*) を使う者も多くみられるのだが、Aは薬草だけを用い、呪文は使用しない。

Aは、自らが使用している個々の薬草の病気に対する効力を、それぞれに含まれる物

質に求める。彼によれば、多くの病気は微小な生物 (*pepet*) によって引き起こされるが、薬草にはそうした生物を殺したり除去する作用をもつ物質が含まれているという。また、西洋医療で使われている薬剤にはこうした物質を植物などから抽出してつくられたものが多くあり、この点で薬草は西洋医療の薬剤と同じようなものであるという。ちなみに、彼は自分の使用する薬草に含まれている物質に関する知見を得るために、ポートヴィラの研究機関に薬草を持参し、成分分析を依頼したことがある。

すでにみたように、Aの用いる技術は長老派信徒の治療者たちのものとかかなり異なっているが、彼はこれらの治療者たちに対して概して批判的な評価をもっている。たとえばこれらの治療者たちのなかには、他人が夢の内容を検証することができないのを良いことに、憶測や推測だけでもの言ったり、ありもしないことをまことしやかに語る者が多いと指摘する。それは月経異常の原因に関する見立てなどに端的に現れており、夢見に依拠する治療者たちはこの異常をある種の霊的存在によるものと見立てる傾向にあるが、Aによればそれは家族計画のための避妊手術の影響などによるものである場合がほとんどであり、霊的存在などとはまったく関係がないという。また、彼は長老派の治療者たちの多くが使用する呪文についても、サエンティフィック・ブルーフ (*saentific pruv*)、すなわち「科学」的な根拠がなく、実際に病気治療の効果があるかどうか疑わしいと述べていた。

夢見などの技術を用いる長老派信徒の治療者たちに対するこうした批判的な評価は、SDA信徒のもう一人の治療者Bにも共有されている。Aと同じようにBもまた、夢見を行う治療者たちのなかには病因を特定したと称して嘘を言っている者が多いと評していた。これらの治療者たちのなかには、患者がすでにその病気について病院で虫垂炎や淋病、ガンなどと診断を受けているにもかかわらず、それらの病気が霊的存在などによって生じていると見立てる者がいるが、Bに言わせればこれも「科学」的な根拠のない、まったくの出鱈目であるという。仮に病院から処方された薬剤などの効果がないとすれば、それは病院の診断が間違っているのではなく、病気を引き起こしている微小な生物が薬剤の効力の及ばないところにいるためであるという。たとえば抗マラリア剤がしばしば思うように効かないのは、マラリアを引き起こす生物が抗マラリア剤の効力の及ばない足指の先や肝臓などにいるためであるとのことであった。

1953年生まれのBは、ポートヴィラで自動車整備工として働いている。彼はSDAの信徒やポートヴィラ在住のトンゴア島民の間でよく知られた治療者でもあり、Aと同じように仕事の余暇時間を利用して、訪ねて来る人々の病気の治療に携わっている。彼は患者と応対している最中に、自分の眼前に立ち現れてくる視覚的現象をみることによって病因を特定する。したがって、彼も夢見はせず、夢のなかで霊的存在と交渉することなどをとおして病気に対処するというものでもない。また、治療の際に使用するのは薬草がほとんどであり、呪文を使用することはない。

BもまたAと同じように、自分の使用している薬草の効力を薬草のなかに含まれている物質に求めており、その成分分析を研究機関などに依頼した経験をもっている。たとえば彼はエイズの治療に効果があるらしいとされる薬草の知識を有しているが、ポートヴィラの保健省にその薬草を持ち込み、本当にそのような効力を有しているのか調査を依頼したことがあったという。また、彼は薬草のなかに含まれている物質は、患者の血液型 (*blad taep*) との関係でその効力が弱まる場合があるので注意する必要があると述べていた。たとえばA型の血液をもつ患者の身体中で効力を発揮する物質を含有する薬草を、B型やO型の血液をもつ患者に与えたとしても、期待した効果を得ることができない場合があるというわけである。Bは、以上にみてきたような自らの保有する薬草の成分や効力に関する知識、あるいは病気に関する知識などを「科学」的な視点に基づくものと位置づけていた。

6 考察

前節で取り上げた2人のSDA信徒の治療者が用いる技術には相違点がある。Aが西洋医療の医師のように問診などによりつつ病因を特定するのに対して、Bは自分の眼前に立ち現れる視覚的現象を手がかりとしながらそれを行う。こうしたBのやり方は、SDAの創始者エレン・ハーモンの初期の活動を彷彿とさせる。ただし、そのような相違点を指摘することができるものの、2人の間には共通点も少なからず認めることができる。たとえば2人はともに長老派信徒の治療者たちが行うような夢見をせず、呪文も使用しない。これらの技術はトンゴア島民の間で伝統的なものとみなされているが、この点でAとBの用いる技術はトンゴア島民の治療者の伝統から大きく逸脱していると言える。また、2人は夢見や呪文を用いる長老派信徒の治療者たちに対して否定的な評価をもっている。さらに、前節でその一端を示したが、2人はいずれも「科学」的な視点を強く意識しており、そうした視点から自らの技術や知識を根拠づけようとする姿勢を色濃く保持している。長老派信徒の治療者たちに対する否定的な評価も、このような姿勢との関連で生じているものとみることができよう。

以上に述べた諸点は、第4節で挙げた、トンゴア島民のSDA信徒たちに認めることのできる三つの特徴のうちの一つかと重なり合うものである。たとえばSDAの信徒たちの間では伝統や伝統文化の改変を厭わない姿勢が顕著であることについて述べたが(1点目)、AとBがトンゴア島民の治療者の伝統とされる夢見や呪文とはかけ離れた技術を使用していたり、夢見や呪文を用いる伝統色の強い長老派の治療者たちに対して否定的な評価をもっていることなどは、こうした姿勢に通じるものとして位置づけることができる。また、SDAの信徒たちの間では食物禁忌の存在理由などが説明される際に、しばしば「科学」的な視点に基づくとされる説明が披露される場合があることについて

も指摘したが（3点目）、同じような種類の説明はAとBが治療技術や病気に関する知識について説明を行う際にもお馴染みのものであった。

ところで、2人の治療者を含むSDAの信徒たちが想定する「科学」的な視点とは果たしてどのようなものなのだろうか。残念ながらこの点に関して十分に答え得るだけの知見を得ることは未だできていないが、さしあたり少なくとも次の2点を指摘することができると思われる。一つは物質の作用の連鎖に基づいて因果関係を説明しようとする見方であり、もう一つは西洋医療の医師や科学者といった「科学」の専門家（とみなされている人々）によってお墨付きを与えられた見方である。こうした見方が、SDAの信徒たちなどの間では「科学」的なものと位置づけられているようにみえる。

さて、第1節ではSDAに対するトーマスの「近代主義者」という評価を紹介した。この評価は、信徒たちの間における伝統文化へのネガティブな姿勢や、開発や観光事業などに積極的に関与してゆこうとする姿勢を踏まえたものであった（Thomas 1997: 203-204）。翻って、伝統や伝統文化に対する改変を厭わない姿勢や「科学」的な視点に対する積極的かつ親和的な姿勢を勘案するならば、「近代主義者」という評価はトンゴア島民のSDA信徒たちにも当てはまるものと考えられる。しかしながら、そのような「近代主義者」たちの間においても、伝統的な事象としての邪術はリアルなものとして受けとめられている。これは一般のSDA信徒たちだけでなく、治療者のAやBにおいても同じである。たとえばAは、邪術によって引き起こされた病気を治療するための薬草に関する知識を豊富にもっており、これらを使用して邪術の被害に遭った人々に対処している。また、同じように邪術による病気に対処するための療法を頻繁に使用しているというBは、彼のもとを訪ねてくる人々に邪術の被害者が多いことを挙げつつ、ポートヴィラにおける邪術の偏在を指摘していた。

では、一般に非科学の代表のごとき存在として扱われることの多い邪術が、「科学」的な視点を強く意識し、そうした視点からものごとを捉えようとする姿勢を色濃くもつAやBのような人々の間において、リアリティをともなったものとして受容されているのはなぜなのだろうか。この問いに対する答えを探ってゆくうえで着目したいのが、トンゴア島民の間で教派を問わず広く共有されている、邪術によって引き起こされる病気の発現過程に関する知見である。以下にその例をいくつか紹介しよう（括弧内は聞き取りを行った年月日、場所、対象者）。

【事例1】

かつてチーフたちが社会的制裁の手段として用いていた邪術では、ある植物と経血が呪物として使われていた。飲食物に混入されたこれらのものが体内に取り込まれると、特定の箇所血液を吸い集めながら大きくなり、体内を熱く乾いた状態にしてしまう。やがて血液の固まりは気管を塞ぐようになり、最終的に当事者を死に至らしめる（1994

年8月21日、ポートヴィラ、長老派信徒の男性)。

【事例2】

飲食物に混入されたポゼン(邪術)の呪物は、体内に取り込まれると腸内に留まり、血液を集め始める。すると、その周辺の血液の循環は悪くなり、血液は止まったような状態になって固まってゆく。したがって、こうした作用に対処するためには、固まった血液(*strong blad*)を便とともに体外に排出させる必要がある。通常の便とは異なる固まった血液を含む便には、ハエがたからないという(1995年8月3日、ポートヴィラ、長老派信徒の男性)。

【事例3】

ポゼンの呪物が体内に取り込まれると、体内に留まり、周囲の血液を吸い集めて大きくなり、ガン(*kansa*)となる。西洋医療を駆使する病院ではこれが手術の対象となるが、このガンはポゼンによるものなので、手術によって切除しただけでは治らず、また再発してくる(1995年6月1日、トンゴア島エウタ(Euta)集落、リヴァイヴァル教会(Revival Church)¹⁰⁾の信徒である治療者夫妻)。

【事例4】

体内に取り込まれた呪物は、腸内で汚い液体を撒き散らすとともに血液を集め、ガンになってゆく。ガンとなった血液は熱く、乾いており、腸を破壊し、周囲の肉の部分に食い込むようにして大きくなってゆく。また、体内のほかの部分に移動することもあり、気管の近くに移動した場合はそこで大きくなって気管を塞ぎ、当事者を死に至らしめる(1994年8月29日、ポートヴィラ、SDA信徒の夫妻)。

以上に提示した四つの例には、体内に取り込まれた呪物が特定の部位に滞留し、血液を集めながら大きくなってゆくという共通のプロセスがある。しかし、そのこと以上に留意したいのは、こうしたプロセスをベースに構成されている邪術による病気の発現過程が、いずれの例においても物質の作用の連鎖による因果関係として描かれているという点である。こうした内容は、トンゴア島民のSDA信徒たちにとっての「科学」的な視点、すなわち物質の作用の連鎖に基づいて因果関係を説明しようとする見方と符合するものと言える。また、四つの例に共通するプロセスは、人々の間で受容されているガンの発現過程に関する「科学」的とされる知見の内容と類似する部分が多い。それはおおむね「飲食物とともに摂取されたガンの要因となる物質が体内の滞留箇所でガンをつくりだす」というものだが、事例3や事例4の場合のように、しばしば邪術による病気とガンが同じものであるかのごとく結びつけられて語られることがあるのは、こうし

た類似性によるのかもしれない。

ともあれ、以上の諸点に基づくならば、人々の間に受容されている、邪術による病気の発現過程に関する知見と「科学」的な視点や説明の仕方の間には、共通性が存在していると捉えることができる。そして、それゆえに、「科学」的な「近代主義者」とも評し得るSDAの信徒たちの間においても邪術はリアリティをともなったものとして受容されている、と理解することができるのではないだろうか。

7 おわりに

本稿では、ヴァヌアツ・トンゴア島民のSDA信徒たちの間における邪術の受容について、人々にとって「科学」的とされている視点や見方との関係に着目しながら考察を行った。キリスト教の浸透にともなう「近代化」や「文明化」の様相に関する従来の文化人類学的研究においては、本稿で対象とした邪術のような当該社会における伝統的な事象と、キリスト教の相克に関する議論に多くのみるべき蓄積がある。これと比較するならば、「近代化」や「文明化」のコンテクストにおけるキリスト教と科学、あるいは邪術をはじめとする伝統的な事象と科学の相互関係に関する文化人類学的議論は、十分に尽くされているとは言い難い。しかし、科学が近代を構成するきわめて重要な要素の一つであることを念頭に置くならば、ここで言及したような諸関係も積極的に考察の対象としてゆく必要があるだろう。本稿はこうした問題意識に基づく試論であった。

ところで、キリスト教化の作用としての「近代化」や「文明化」の議論からは逸れるが、科学的思考の浸透を中心とした近代化の進展と、そうした状況下における邪術を含む呪術 (magic) と科学の相互関係については、文化人類学をはじめ宗教学や社会学などの分野で多くの議論が積み上げられてきた。大雑把のそしりを承知でそれらの議論を大別するならば、次の二つの種類に分けることができると思われる。一つは、科学の浸透とともに呪術が科学に取って代われ、衰退してゆくというもの。いわゆる脱呪術化の議論である。もう一つは、科学の浸透後も科学の対応できない領域が残り、呪術はそこを守備範囲としながら科学と並存してゆくという議論である。マリノフスキーやエヴァンズ＝プリチャードをはじめとして、文化人類学者の議論にはこの後者の議論に該当するものが多い。

これら二つの種類の議論との関連で、本稿で提示したトンゴア島民のSDA信徒たちの事例を今一度振り返ると、いずれにもうまく当てはまらないように思われる。SDA信徒たちの間では「科学」的なものの捉え方が受容されている反面、邪術もまた衰退しているとはみなされていない。人々の間において邪術はリアルさを失わずに存在し続けており、「科学」的な見方とも結びつくことによってむしろその実在性を強めているかにみえる。こうした事態は、脱呪術化論はもとより「呪術と科学の並存」という構図か

らも外れるものと言える。なぜなら、この構図では呪術と科学は互いに質を異にし、明瞭に区別することができるものとして扱われているのだが、これに反してトンゴア島民のSDA信徒たちの事例では、両者は「物質の作用の連鎖に基づく因果関係を用いた説明」という属性を共有しており、この点で重複する部分をもつものとして捉えることができるからである。

一方、以上に指摘した点に依拠するならば、呪術と科学の相互関係に関する従来の議論の難点もみえてくる。二つの種類の議論はいずれも、呪術と科学の間には截然とした質的区別を設けることができるという見方に基づいている。しかし、そのような見方を無批判に前提にすると、特定の人々の間における呪術と科学の相互関係をこれらの人々の視点から適切に理解することが困難になる。こうした事態を避けるべく、まずは人々によって呪術や科学がどのようなものとして捉えられているのか(呪術観、科学観)を、丹念に理解する必要があるだろう。

以上の諸点を念頭に置きつつ、本稿では「トンゴア島民のSDA信徒たちにとっての科学」という意味合いを明示するべく、科学という語に括弧を付して用いてきた。しかし、彼ら彼女らが理解しているものとしての「科学」ないしは「科学」的な視点や見方が果たしてどのようなものであるのかという肝心の点については、断片的な知見を提示できたにすぎない。トンゴア島民のSDA信徒たちの間における「科学」と邪術の相互関係を理解するうえで、今後この点に関する知見を深めてゆくことが不可欠の課題となるのは言うまでもない。他方で、こうした課題への取り組みは、従来の呪術に関する議論に認めることのできた、呪術と科学の間に明瞭な質的区別を設けることができるという見方をはじめとして、議論の担い手である研究者の側の呪術観や科学観を相対化するような試みにも自ずとつながってゆくものとなろう。

注

- 1) 太平洋島嶼諸国におけるSDAの活動や、同派の信徒の動向について本格的に取り上げた研究は非常に限られている。代表的な研究には、パプアニューギニア以外の諸国におけるSDAの活動の歴史を網羅的に検討したステレーの論文などがある(Steley 1990)。ヴァヌアツのSDA信徒たちの動向について中心的に取り上げた研究は皆無に等しい。
- 2) ただし、ヴァヌアツ中部のアンブрым(Ambrym)島の人々の間では、妖術的な要素を認めることができるものも使われているという(Rio 2002)。しかし、こうした妖術的な事例に関する報告はヴァヌアツではきわめて稀である。
- 3) 私はこれまで5次(①1991年4月～93年4月、②94年7月～9月、③95年4月～96年4月(約1ヶ月の中断をはさむ)、④2000年8月～9月、⑤2001年8月)にわたり、合計3年2ヶ月、ヴァヌアツに滞在してきた。本稿で提示するトンゴア島民のSDA信徒たちに関する知見は、第2次の滞在時にポートヴィラで得たものと第3次の滞在時にトンゴアで得たものが中心となっている。このうち第3次の滞在は、大和銀行(現りそな)アジア・オセアニア財団平成

7年度国際交流活動助成を受けることで可能となった。なお、第1次の滞在時には、ポートヴィラを拠点としつつ、青年海外協力隊員としてマラリア対策活動に従事していた。

- 4) 本節の論述内容は、主にステレーのものをはじめとする複数の論文とSDAの出版物などに基づく (Butler and Numbers 1987; Ministerial Department n.d.: 56-57; Numbers 1987; Steley 1990: 2-15, 20, 52, 60)。
- 5) 本節の論述内容は、ステレーの論文やSDAによる出版物などの著作物と (Bonnemaison 1994: 77; Parkinson 1992: 8; Steley 1990: 94-97, 124-125, 135-137; van Trease 1995: 5)、ポートヴィラに住むトンゴア島民の熱心なSDAの一般信徒たち (すべて男性) から得ることのできた情報に基づく。
- 6) 橋本によれば、カヴァの飲用が広く行われてきたフィジーでも、SDA信徒たちの間では「神の宿る身体を汚すことになる」として、カヴァを飲むことが禁じられている場合が多いという (橋本 1996: 267)。
- 7) こうした出版物や冊子類の一般の信徒たちへの販売ないし配布事業は、ほかの太平洋島嶼諸国のSDA教会でも活発に行われているようである。たとえばフォスターは、バプアニューギニアのSDA教会によってアルコールやタバコ、麻薬の弊害を解説した冊子 (“God Wants You to be Healthy!” というタイトル) が配布されていることについて触れている (Foster 2002: 105)。
- 8) ここで例示したような説明の内容の一部は、ポートヴィラのSDAの書店で扱われていた出版物のなかにもみいだすことができるものであった (Ministerial Department n.d.: 57)。
- 9) これら2人の治療者の治療技術などについては別稿でも検討の対象としたことがある (白川 2002a: 193-194)。
- 10) リヴァイヴァル教会は、1982年に長老派教会から分離する形でできたヴァヌアツ独自の新興教派であり、聖霊の降臨を積極的に称揚するなどのペンテコスタリズム的な特徴をもつ。トンゴアを含むシェファ州に信徒が多い。

文献

エヴァンズ=ブリチャード, E. E.

2001 『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』向井元子訳 みすず書房。

白川千尋

1996 「ある長老派教会エルダーの活動—ヴァヌアツにおけるメラネシアン・ウェイの様相」『アジア経済』37 (2): 63-77。

2000 「ヴァヌアツ・トンゴア島民の病因論からみた都市—邪術の存在論との関連で」熊谷主知・塩田光喜編『都市の誕生—太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容』アジア経済研究所 pp. 183-217。

2001 『カスタム・メレシ—オセアニア民間医療の人類学的研究』風響社。

2002a 「正体不明の霊—ヴァヌアツ・トンゴア社会の民間治療者における持続と変容」河合利光編『オセアニアの現在—持続と変容の民族誌』人文書院 pp. 186-209。

2002b 「ヴァヌアツにおける呪いと福音—長老派教会の福音伝道運動をめぐって」杉本良男編『国立民族学博物館調査報告31—福音と文明化の人類学的研究』国立民族学博物館 pp. 271-291。

杉本良男編

2002 『国立民族学博物館調査報告31—福音と文明化の人類学的研究』国立民族学博物館。

橋本和也

1996 『キリスト教と植民地経験—フィジーにおける多元的世界観』人文書院。

Bonnemaïson, J.

1994 *The Tree and the Canoe: History and Ethnogeography of Tanna*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Butler, J. M. and R. L. Numbers

1987 Seventh-day Adventism. In M. Eliade *et al.* (eds.) *The Encyclopedia of Religion: Vol. 13*. New York: Macmillan Publishing Company. pp. 179-183.

Foster, R. J.

2002 *Materializing the Nation: Commodities, Consumption, and Media in Papua New Guinea*. Bloomington: Indiana University Press.

Ministrial Department

n. d. *Bible Class Manual: Reaching the Unreached, 3rd Edition*. Western Pacific Union Mission, Seventh-day Adventist.

National Statistics Office, Vanuatu Government

2000 *The 1999 Vanuatu National Population and Housing Census: Main Report*. Port Vila: National Statistics Office.

Numbers, R. L.

1987 Ellen Gould White. In M. Eliade *et al.* (eds.) *The Encyclopedia of Religion: Vol. 15*. New York: Macmillan Publishing Company. pp. 377-379.

Parkinson, L.

1992 *Stories from Vanuatu: Supplementary Reader 2*. Wauchope: M&S Print.

Rio, K.

2002 The Sorcerer as an Absented Third Person: Formations of Fear and Anger in Vanuatu. *Social Analysis* 46: 129-154.

Steley, D.

1990 Unfinished: The Seventh-day Adventist Mission in the South Pacific, Excluding Papua New Guinea, 1886-1986. Ph. D. thesis, University of Auckland.

Thomas, N.

1997 *In Oceania: Visions, Artifacts, Histories*. Durham: Duke University Press.

van der Veer, P. (ed.)

1996 *Conversion to Modernities: The Globalization of Christianity*. New York and London: Routledge.

van Trease, H. (ed.)

1995 *Melanesian Politics: Stael blong Vanuatu*. Christchurch and Suva: University of Canterbury and University of the South Pacific.

Werner, D.

1977 *Where There is No Doctor: A Village Health Care Handbook*. Palo Alto: The Hesperian Foundation.